

教育事例

# 「福祉心理」授業の実践報告

## —視覚障害者の講話を取り入れた教育効果—

加藤みち代 (信州短期大学)

### Practice report of the "welfare psychology" subject lesson

#### —The education effect that adopted the lecture of the visually impaired—

Michiyo Katou (Shinshu Junior College)

**Abstract:** In "the psychology of the handicapped person" that is one of the themes of the "welfare psychology" subject, I consider an education effect to be provided by adopting the lecture of the visually impaired by analyzing the report of the student.

**Keywords:** welfare psychology, the psychology of the handicapped person, self-understanding, others understanding

#### I. はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災により、多くの尊い命が奪われた。そして、生き延びた人々を待っていたのは家族や家、仕事、中には街（コミュニティ）ごと失った非日常的な過酷な生活である。この震災を機に多くの日本人が命の大切さ、幸せとは何かと自問自答しながら、これからの自分の生き方や、この国のありようについて考えたのではないだろうか。

本学総合ビジネス学科科目である「福祉心理」とは、まさに「幸せに生きるとは何か」を学ぶ科目であるといえる。「福祉」とは幸せを感じる心の状態であり、「心理学」は人間を幸せにするために、人間の心の働きや構造を科学的方法で研究する学問<sup>1)</sup>であり、福祉と心理学の概念は一致する。つまり、心理学で得られた知識や技術を人間の心のやすらぎや生活の安定のために生かしていく学問が「福祉心理学」である。

筆者は「幸せとは何か」を念頭におき、児童・障害者・高齢者等、社会的に弱い立場におかれている人々の社会問題をテーマに、授業計画を作成し実践している。学生が自分で考えられるよう双方向的な授業を心掛け、演習・事例問題・視聴覚教材等、学生が興味を持つような内容に取り組んでいる。その中で、障害当事者を招いて講話をしていただく「障害者の心理」の授業では、特に学生の関心が高く、学びも深いと感じられる。そこで、

この授業において、どのような教育効果が得られたのかを、学生のレポートの内容を分析することで考察する。

#### II. 研究方法

1. 対象：信州短期大学総合ビジネス学科科目「福祉心理」受講学生56名（2008年18名・2009年12名・2010年18名・2011年8名）
2. 方法：障害当事者の講話終了後作成する自由記述のレポートをKJ法を参考にし、学生の意見をカテゴリー化して、分析する。
3. 倫理的配慮：この研究を行うにあたり、障害当事者及び対象学生には、口頭で内容を説明し同意を得た。

#### III. 「福祉心理」の概要

1. 「福祉心理」科目の位置づけ  
本学総合ビジネス学科において、指定科目を履修することで「訪問介護員（ホームヘルパー）2級」資格が取得できる。福祉心理科目はその指定科目の一つとして位置づけられている。
2. 「福祉心理」の授業目的
  - 1) 社会的に弱い立場にある人々の内面の世界を知り、対応方法を学ぶ。
  - 2) 自己理解を深め、他者の気持ちに共感できる感性を育む中で、幸せに生きることについて考える。

【表1】「福祉心理」授業計画

回数	授 業 内 容
1 回	授業ガイダンス「福祉心理学とは何か」
2 回	自己理解・他者理解「エゴグラムの演習」
3 回	エリクソンの発達段階説
4 回	アイデンティティの確立「プレイブストーリーより読取る」
5 回	増える児童虐待「世代間連鎖は断ち切れるか」
6 回	援助を必要とする子供達「自閉症児」
7 回	援助を必要とする子供達「出生前診断」
8 回	障害者の心理「アイマスク体験」
9 回	障害者の心理「視覚障害者の講話」
10 回	障害者の心理「障害者の詩を読んで」
11 回	高齢者の心理「高齢者虐待」
12 回	高齢者の心理「ターミナルケア」
13 回	メンタルヘルス「うつ病と自殺」
14 回	心のケアに用いられる心理療法「音楽療法・他」
15 回	定期試験

### 3. 「福祉心理」の授業計画

児童・障害者・高齢者等の分野で社会問題とされるテーマを取り上げ、「もし自分がその人の立場だったら」、「幸せとは何か」という視点で取り組める内容（表1）とする。自分で考え、自分や他者を理解できるよう演習・事例問題・視聴覚教材等を多く取り入れた。

### 4. 「障害者の心理①・②」の指導案（第8回・第9回）

#### 1) 第8回指導案

第9回の授業内容「視覚障害者の講話」に繋げるための事前学習として位置づける。①視覚障害者の現状（人数・障害分類）②失明に至る要因（疾病・事故・先天性等）③障害受容の心理プロセス④心理的特性、以上、①～④の講義を60分行った後、2人でペアを組み交代でアイマスク体験（階段も含む学内を歩く）を20分実施し、10分で感想を一人ずつ発表する。

見えない世界を疑似体験することで、視覚障害を持っている人の世界をイメージする。その上で見えないことの怖さ、苦しみ、悲しみといった負の感情を想像する。

#### 2) 第9回指導案

視覚障害者Aさんの講話を聴く。Aさんは全盲の視覚障害のある50代の女性である。まず、10分程Aさんの紹介を筆者がし、次に60分間の講話をして頂く。講話終了後5分間の質疑応答。ラスト15分間で感想・学んだことをレポート作成する。学生が書いたレポートは授業終了後回収し、Aさんに聞いて頂きレポートについての感想を聞かせて頂く。講話内容は「障害者の心理」に添った内容となるよう事前に依頼しておく。

以下、Aさんの了解の上、本人が特定しないよう配慮し、講話内容を要約して示す。

#### 【Aさんの講話内容】

小学校3年生の時に視力が低下し病院で診てもらったが、病名は分からなかった。その後も徐々に見えにくくなり17歳の時に網膜色素変性症と診断された。この病気は難病指定されており、徐々に視力が低下する進行性の疾患で現在治療法は確立されていない。この病気を知ってから不安や辛い気持ちになり、夜ふとんの中で泣いていたこともあった。

結婚し子どもが生まれた頃までは日常生活に支障はなかったが、出産後急激に視力が低下し、子どもに絵本を読んであげようとしたところ、絵本の文字がミミズのように見えて字が読めなくなった。自分の夢は子どもに絵本を読んであげることだったので、何とか字が読めなかと考え、点字を勉強することにした。点字図書館の元館長さんがボランティアで毎週通ってきて点字を教えてください、1ヶ月位で点字が読めるようになった。点字は一番敏感な指である左手の人差し指で読んでいる。その際、元館長さんから盲導犬の利用を勧められたが、盲導犬は買うと思っていたので辞退したところ、制度の中で無料でもらえると教えてもらい、盲導犬の申請手続きをした。和歌山県にある盲導犬訓練施設に1ヶ月滞在し、研修した後盲導犬をもらい受け、その日から盲導犬との生活が12年間続き、自分の目となって働いてくれた。Aさんの市ではAさんが初めての盲導犬利用者で、その当時は珍しく、盲導犬に対する人々の理解も低く、盲導犬へ声をかけたり触ってはいけない、食べ物を与えてはいけないといったルールを知らなかったり、お店に犬と一緒に入れなかったりと大変なこともあった。しかし、今は補助犬法ができ行動しやすくなってきている。病気で盲導犬が亡くなった時は、自分の体の一部をとられてしまったような辛い気持ちになった。

ある時元館長さんから、一人の青年のお話を聞かせて頂いた。20代のその青年は、ある朝起きたら突然目が見えなくなっていた。原因は分からない。ショックでひきこもり、「死にたい。死にたい。」というばかりで家族も困っていた。元館長さんが彼に会うと「目の見える人に、見えない人の気持ちが分かるものか」と言われ、「ああ、分からない。でも何とか力になりたいという気持ちは人一倍持っている。君は若いんだからいろいろな力を持っている。親にもらった命なんだから、やれるだけのことはやってみろ。」と答えたそうだ。現在その青年は役所に入り、立派に社会生活を送っているとのこと

である。

6年ほど前、庭にいて家に入ろうとしたら墨のような真っ黒な世界になり家が見えなくなった。それまでは、曇りガラスから見たようなぼんやりとした物の形や光を感じる事ができていたので、完全な失明状態になってしまったことで、どうしていいか分からなくなってしまった。胸が苦しくて誰かに抱きしめてほしいと思った。その時、同じ病気の友達に電話したところ「暗くても何でもできるわよ。私も10年前からその世界だったのよ。」との言葉に、私だけじゃないと思い、仲間から力をもらって乗り越えられた。

現在家事はひととおりにこなし、天ぷらをあげたり漬け物もつける。子どものお弁当も作っている。怖いと思ったらそこから何もできなくなってしまう。自分でやろうという気持ちが大切である。障害を持つと、辛い、苦しい、せつない、私は何もできないからと周りが何でもやってくれる。そうすると本人は自立できない。私たちはいろいろな世界の中で生きているけれど、その世界の中で生きる術をみい出すことである。障害とは決して他人事ではなく、いつ誰に起こるか分からない。もし、障害を持った人に出会ったら同情ではなく「何かお手伝いすることはありますか?」と普通に声をかけてほしい。声を掛けてもらうだけでとてもうれしい。

最後に、若いということはすばらしいこと。そして健康であれば何でも挑戦できる。健康に産み育ててくださった親御さんや周りの人に感謝して、常に夢や願いを持って生きていってください。

#### IV. 実践結果と考察

56名の学生のレポートより、315件の意見・感想等を抽出し、類似する内容を集めてカテゴリー化した結果(表2)より考察する。

三澤は、「障害者の心理を理解するためには、障害に関する正しい知識と理解とを一般に広く普及させることと、できるだけ実在の障害者と触れ合う機会を多くすることであり、一方だけに偏した方策は必ずしも有効ではない。」<sup>2)</sup>と述べている。このことより、8回目の授業で知識、特に障害受容の心理的プロセスを講義し、9回目の授業で障害当事者と触れ合う授業内容とした。障害受容の心理的プロセスは、ショック→回復への期待→混乱と苦悩→適応への努力→適応<sup>3)</sup>といったプロセスをたどると言われている。学生の意見が、これらの各プロセスにカテゴリー化されたのは興味深い結果であった。「シ

ョック期」に関する意見は34件で全体の10.8%、「混乱と苦悩期」に関する意見は73件で全体の23.2%、「適応への努力期」に関する意見は57件で全体の18.1%、「適応期」に関する意見は64件で全体の20.3%、そして、一番多かった意見として、今の自分を見つめたり、これからの自分自身の生き方に関するものが87件で全体の27.6%であった。

この結果より、学生はAさんの講話を聴くことで、もし自分がAさんの立場だったらと、相手の気持ちを想像している。つまり、追体験をしていると考えられる。第1群の、突然失明したら、どんなにショックだろう。きっと前向きに生きられない。パニックになる。死にたくなる。といった意見はショック期の心理状態であり、失明の要因である網膜色素変性症、白内障といった疾病にも関心を示し、その記述も6件あった。第2群の混乱と苦悩期の心理状態については、見えない恐怖や不安に関する意見が48件あった。8回目の授業でアイマスク体験をしたことによって、見えない世界の怖さや不安を疑似体験したが、そのことで余計当事者の気持ちが理解できるといった意見も6件あった。第3群の適応への努力期については、「見えない世界で自立して生きていくために、何をしていかなければならないか」について、Aさんの講話の中で具体的なお話が聞けた。移動のための盲導犬の利用。点字の訓練。鍼灸師等の資格を取得し仕事を得る。家庭での日常生活を送るために、物を常に同じ場所に置く工夫。といった体験談を聞くことで、学生はこの努力期の大変さをイメージしている。そして、本人の努力もさることながら、支えている家族や友人の存在の大きさも重要であることまで思いをはせている記述が11件あった。障害受容の最後の適応期の第4群については、「Aさんは目が見えなくても、料理や家事を普通にこなしていることがすごいと思った」といった記述が31件あった。これは、多くの学生が、目が見えないと一人では何もできない、というイメージを持っているからである。そして、Aさんのように努力することで、いろいろなことができるということに対して、驚きと尊敬の念を抱くのだと考える。ここで障害を受容し、見えないという新しい自分の体が環境に適応していくことによって、生き生きと前向きに生きていくことができる。その体現者であるAさんを目の前にして、人間の強さを肌で感じる。まさに、当事者の講話を直接聞くことの効果がここにあるのだと思う。

また、Aさんに学生のレポートを聞いて頂いた時の感想として、「自分の話をしっかり受け止めてくれてうれ

【表2】レポート記述カテゴリー表

カテゴリー名	記述データ	件
【第1群】 障害受容のプロセス「ショック期」	自分なら前向きに生きられない (13)・弱気になる (6)・引きこもる (5)・網膜色素変性症 (5)・パニックになる (3)・死にたい (1)・白内障 (1)	34
【第2群】 障害受容のプロセス「混乱と苦惱期」	見えない恐怖 (30)・不安 (18)・辛い (6)・アイマスク体験 (6)・悲しい (4)・大変 (3)・苦しい (2)・落ち込む (2)・切ない (1)・寂しい (1)	73
【第3群】 障害受容のプロセス「適応への努力期」	盲導犬 (36)・Aさんが前向きに生きられるのは家族や友人の支えがあったから (11)・点字 (8)・鍼灸師 (2)	57
【第4群】 障害受容のプロセス「適応期」	料理などの家事をこなしているすごい (31)・前向き (16)・明るい (5)・精神的な強さ (5)・尊敬できる (3)・生き生きとしている (2)・障害の受容ができている (2)	64
【第5群】 自分の生き方について思うこと「自己理解」	健康であることや親に感謝したい (17)・当たり前前に生きていることが幸せ (12)・Aさんに負けないように一生懸命生きていきたい (12)・障害者を支援したい (11)・人間やる気になれば何でもできる (7)・いろいろな事に挑戦していきたい (6)・前向きに生きていきたい (5)・勇気、元気をもらい励まされた (4)・感動した (4)・自分の悩みなんでちっぽけなものに思えた (3)・どんな経験も無駄なものはない (2)・どんな人も受け入れられる器の大きな人間になりたい (1)・夢や願いを持ち続けたい (1)・人との出会いは大切 (1)・今の自分が恥ずかしい (1)	87

しい」「素直で気持ちの優しい学生さん達ばかり」とおっしゃられた。この感想から、聞いてもらえたことへの満足感、人の役に立てたという自己肯定観、若い人との交流の楽しみなどの心理的効果がAさんにもみられ、話し手、聞き手の双方に効果があったと考える。

く苦しい体験は誰れにでもあり、それをどのように乗り越えていくのが大切である。その方法は一人ひとり違うと思うが、「福祉心理」の授業を通して、それぞれの幸せな生き方を見つけてくれたら良いと考える。

[投稿 23 年 9 月 30 日、受理 24 年 1 月 19 日]

## V. まとめ

「福祉心理」の授業計画の中で、「自己理解を深め、他者の気持ちに共感できる感性を育み、幸せに生きることについて考える」を授業目的の一つとした。視覚障害者の講話を取り入れた結果、学生の自己理解・他者理解が深まり、この目的は達成できたのではないかと考える。そして、レポートの最後に多くの学生が次のような意見を述べている。「今日の講話を聞いていて、本当に人間やる気になれば何でもできるんだ。Aさんに負けないようにこれからいろんなことに挑戦していきたい。そして、元気で生きていることが当たり前ではなく、どれだけ幸せなことかを実感できた。五体満足に生まれてきたことを両親に感謝したい。」この思いは、その時だけの感情の高揚であるかもしれないが、当事者の講話を聴くことで「幸せについて」考える機会となったのではないかと考える。

また、Aさんのように、障害を受容し、大変な困難を乗り越え前向きに生きている人ばかりではない。受容できず、心病む人、引きこもってしまう人、中には自ら命をたってしまう人もいる。そのような生き方をする人も大勢いることも学生には説明している。障害に限らず辛

## 〔引用・参考文献〕

- 1) 宮原和子・宮原英種：福祉心理学を愉しむ ナカニシヤ出版 p13 2002年
- 2) 福祉士養成講座編集委員会（偏）：老人・障害者の心理 中央法規 p117 2008年
- 3) 福祉士養成講座編集委員会（偏）：老人・障害者の心理 中央法規 p174 2008年